

中心問題：教師による中学生への性的虐待問題

✔ この問題に着目した理由

教師による性加害のニュースが最近増えていると感じ、このテーマを選びました。

✔ 関係者分析

初めは、広く性被害の関係者分析を行いました。その後、未成年の中で、女子中学生の被害が特に多いことが分かりターゲットを女子中学生に設定しました。

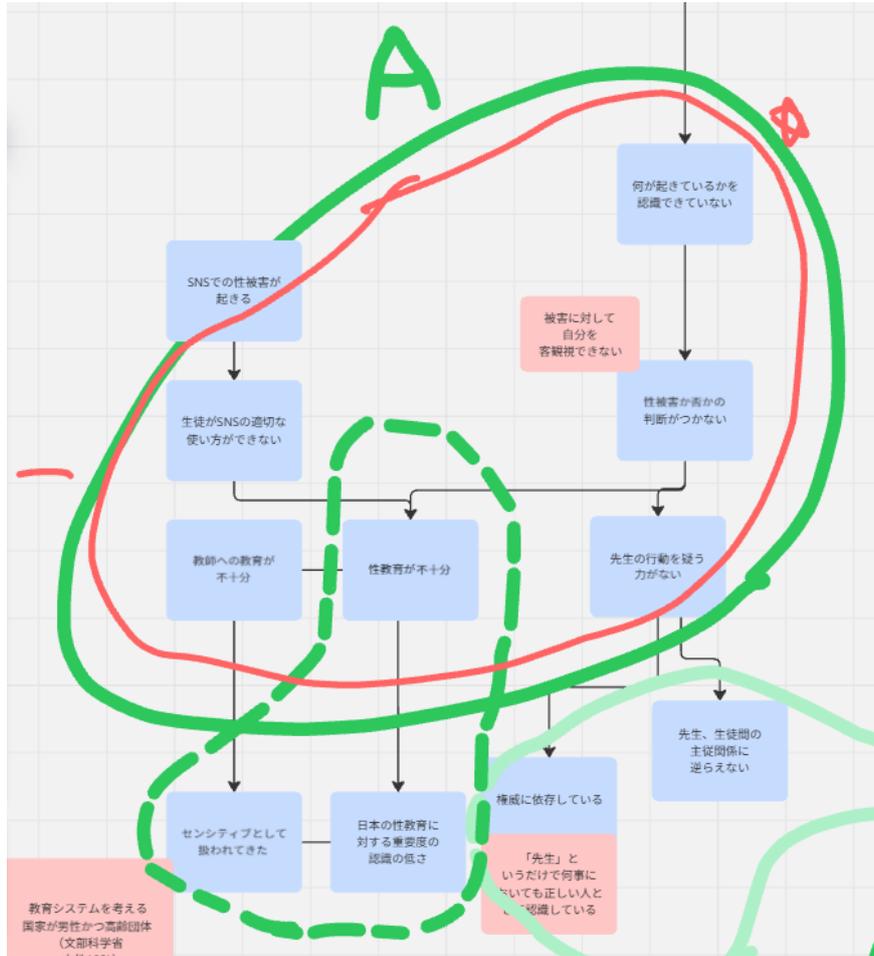
✔ 問題分析

大きな問題として5つ挙げられました。

1. 性被害が表に出ないこと
2. 被害にあった際に、何が起きているかを認識できていないこと
3. 盗撮の場合、盗撮に気づいていないこと
4. 被害時に断れないこと
5. 誰にも相談できないこと

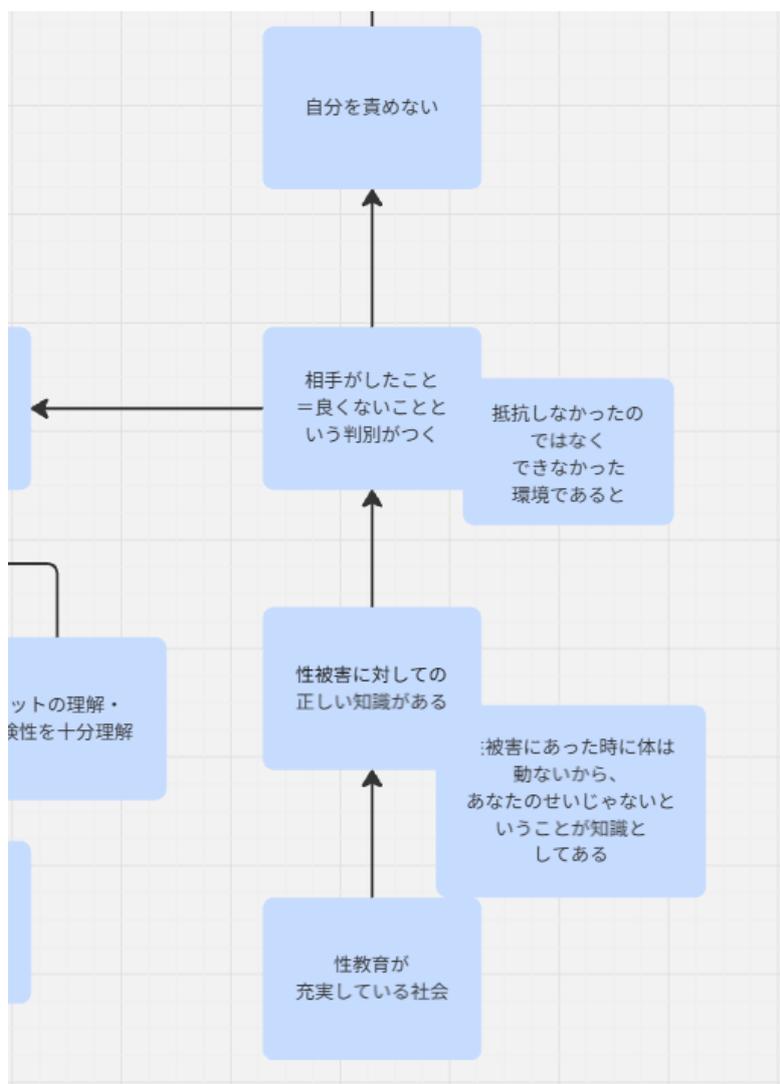
被害者目線だけでは、分析は停滞してしまうことがあり、加害者がどういった手口を用いるのか、どういった子どもを狙うのかを調べ、想像することでより深く分析できたと考えます。また、このテーマでは、透明性（犯罪として明るみに出るべきこと）と秘匿性（誰にも知られたくないという当事者の思い）という相反する側面がありそのバランスの難しさも明らかになりました。

(一部の分析の画像)



✓ 目的分析

目的分析によって、中学生が被害を受けた際に、それを「被害」と認識し言語化できる力が重要であると明らかになりました。また、法整備を厳格化することによって再犯や性犯罪の発生が減少する状態も考えられました。



✔ プロジェクト

「グレーゾーンにいる中学生の性被害への認識と安全な相談機関への導線プロジェクト」

- 内容：大学生が中学校に行き、一緒に大人との適切な距離感についてディスカッションを行うことでグレーゾーンを認識させる。その後、専門の相談機関への QR コードを配布。
- ターゲット：中学生
- プロジェクトメンバー：大学生（私たちと設定）

A：何が起きているかを認識できていない

B：誰にも相談できない

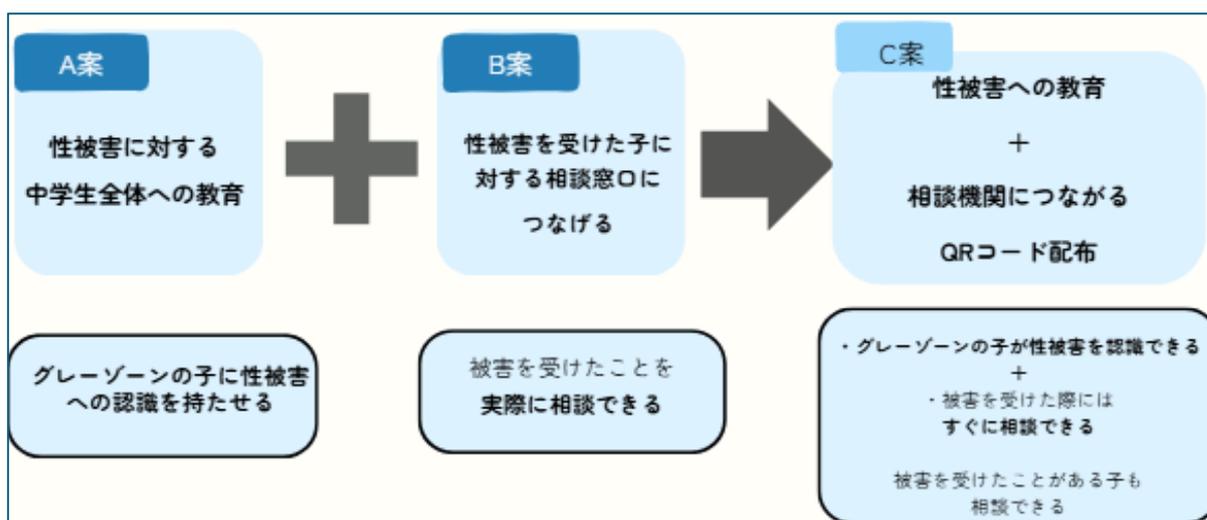
A 案と B 案の二つを比較してどちらか一つに絞るのではなく、両方を合わせたプロジェクトを構成しました。

- グレーゾーンとは、「被害を受けた際に、それが性被害か否かを判断できず、そのまま終わってしまう状態」として定義しました。実施者を大学生とした理由は、教師より年齢が近く、日常的に関わらない存在であるため、新たな視点からの影響力があると判断しました。

(A案とB案の比較)

	A案	B案
ターゲットグループ	中学生（被害を受けていない、受けた中学生）	すでに被害を受けた中学生
受益者のニーズ	高い	非常に高い
政策的優先度	高い	非常に高い
必要な資源	指導者（指導員への指導）、 中学生へ教育する教材	QRコード、性被害を専門とする相談 機関
費用	大きい	小さい
技術的難易度	非常に高い	高い
費用対効果	大きい	非常に大きい
達成可能性	高い	低い
リスク	大きい	大きい

(比較後のA案とB案を合わせたC案)



イメージ



✔このプロジェクトの理由

A案では被害を受けた子も受けていない子どももターゲットであり、B案では既に被害を受けた子どもがターゲットでした。そのためA案とB案を合わせることで、今後被害を受ける可能性がある子どもが適切に対処できると考え、本プロジェクトを構成しました。

✔小西先生からのフィードバック

このプロジェクトは、教師からの性被害防止プロジェクトとして学校で行うため先生の協力を怠ってはならないという指摘を受けました。このフィードバックを受けて、先生もともに学び、生徒を守る仲間の一人であると認識しました。そのため、先生と生徒が同じ空間で学ぶ形式が適切かどうかについては、さらに検討が必要であると考えました。

✔学んだこととこれから

テーマが重いこと、また自分たちが直接的な当事者ではないからこそ、当事者を想定し、加害者の目線も持って分析する必要があると学びました。PCM分析をチームで行うことで、自身では想定していなかった関係者が明らかになり、案をどちらかに絞るのではなく、合わせるのはいかがでしょうかといった新しい視点が出てくることが大変学びになりました。